

女子ハンドボール競技における左利き右バックコートプレーヤーのシュートプレー

-世界トップレベルと日本の学生選手の特徴-

中村 歩夢 (201811976、ハンドボールコーチング論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：ミドル・ロングシュート、カットインシュート

【目的】

ハンドボール競技において攻撃の中心となるバックコートプレーヤーの中でも、近年は、右バックに左利きプレーヤーが配置されることが多い。しかし、これまでに世界トップレベルにおける左利き右バックのシュートプレーに関する研究は行われていない。そこで、本研究では世界トップレベルの左利き右バック（以下、世界トップ）のミドル・ロングシュートプレーおよびカットインシュートプレーの特徴を明らかにすることを目的とする。また、本研究者（以下、中村）も分析対象とし、自分が試合で行っているシュートプレーの問題点や改善点を検討することによって、今後の競技人生に活かすことを目的とする。

【方法】

世界トップとして、VYAKHIREVA、MORK、RYU の 3 選手を、日本の学生選手として、中村を選出した。分析対象試合は、対象者が出場した公式戦、全 54 試合とした。本研究では、シュートプレーに関するプレー要素を、ボール保持前の助走、ボール保持の瞬間、ボール保持中の助走、シュートの 4 つに分類し、それぞれの要素において分析項目を作成した。具体的には、ミドル・ロングシュートでは全 21 項目、カットインシュートでは全 14 項目であった。

各個人について、分析項目ごとに項目間の生起率を比較した。統計処理に関しては、有意水準 5%（両側検定）とし、Fisher の正確確率法を用いて比率の差を検定した。3 つ以上の項目で有意差が認められた場合には、Ryan の方法により有意水準を調整して多重比較を行った。

【結果と考察】

1、VYAKHIREVA のシュートプレーの特徴

助走なしのプレーや防御者と正面で対峙するプレーが多かった。さらに、シュート局面では、さまざまなシュートタイミング、シュートステップ、フェイントを用いることが多かったことから、1 対 1 の状況打破ができていると考えられる。

2、MORK のシュートプレーの特徴

ゴール方向への助走が多くゴールに対して非利き腕側を向ける体勢でプレーしていることが多かった。ミドル・ロングエリアにおいては、センターエリア

の 9m 内でシュートを打つことが多く、シュートコースに有意差が出なかったことから、対峙する防御者およびキーパーのそれぞれと駆け引きをしながらシュートを打っていると考えられる。

3、RYU のシュートプレーの特徴

ミドル・ロングエリアにおいては、ドリブルを使用せずにゴール方向へ助走すること、防御者がチェンジをする状況でシュートに至っていることが多かった。シュート局面では、上半身を非利き腕側に傾斜させたり、ミドル・ロングシュートに対して防御者が反応したところをジャンプシュートフェイクで突破してカットインシュートを打ったりなどの駆け引きをすることによって、より効果的なシュートプレーになっていると考えられる。

4、中村のシュートプレーの特徴

ミドル・ロングエリアにおいては、ドリブルを使用せずに、コート中央の 9m より外で限られたステップパターンとスイング動作でシュートに至っていることが多かった。また、全てのシュートプレーにおいて、フェイントを用いてシュートに至ることが多かった。今後は、本研究者が得意とするミドル・ロングシュートを常に打てるようゴールを狙いながらプレーすると同時に、防御者がミドル・ロングシュートのみに対応するような守り方の場面でフェイントを用いた突破を試みること、シュート局面では様々なバリエーションでシュートを打てるようになることが求められる。

【結論】

世界トップは、それぞれが自己の形態や個性を活かしながら目の前の状況に応じたシュートプレーを実践していた。一方、中村は、シュート時の工夫が少なく、シュートバリエーションが限られていた。今後中村がプレーする競技レベルでは、防御者とゴールキーパーの連携がさらに強くなることが予想されるため、シュートタイミングに変化をつけることによって防御者を惑わせ、ゴールキーパーとの連携を崩すことが必要になってくる。また、シュートタイミングを変化させる一つの手段としては、様々なシュートのステップパターンを用いることも効果的であると考えられる。